



かがやく浜の子

令和2年度2月号

令和2年度重点目標 「チャレンジいっぱい かがやきいっぱい」

読書について

本校では、毎日の朝活動（8：10～8：20）に、「読書の時間」を設定しています。特に木曜日は、ボランティアグループの「どんどん」さんたちと本校教員が、子供たちへ読み聞かせを行っています。教員の分担で、私は1月と3月に6年生のそれぞれのクラスで、読み聞かせを行うことになっていました。6年生に向けては、小学校生活最後の読み聞かせとなります。「どんな本を読もうか」と、学校図書館や太陽広場（学年毎のおすすめの本が置いてあります）を探しました。数冊をピックアップしている内に『いのちのおなはし（文；日野原重明、絵；村上康成）』という一冊の絵本を見つけました。

『いのちのおなはし』は、95歳の医師である日野原重明さん（2017年に105歳で御逝去）が、小学校で行ってきた授業の様子を書き起こしたものです。日野原さんは、子供たちに「いのちってなんでしょう？生きているとはどういうことだと思いますか？」と問いかけます。聴診器を使って、一人一人に心臓の音を聞かせた後、「いのちはどこにあると思いますか。」と聞くと、子供たちは「心臓」「頭」「体全部」といろいろな意見を出します。日野原先生は、意見にうなずきながらも「いのちは、きみたちのもっている時間だといえますよ。」と伝えます。びっくりする子供たちに「いま、きみたちは、どのようにでもつかえる自分の時間をもっている。時間をつかうことは、いのちをつかうことです。」「これから生きていく時間。それが、きみたちのいのちなんですよ。」と続けます。日野原さんは「あとがき」の中でも「いのちと時間」と「こころの持ち方」について触れています。

10数年ほど前、初めてこの本を読んだときには、「なるほどそういう捉え方もできるんだ」と新鮮に感じました。私自身、人生の折り返し地点を過ぎ、教職も残り少なくなってきた今、あらためて読んでみると「やるべきことをしっかりとやらなければ」という想いにもなります。小学校生活も後わずかになり、新たな旅立ちに向かう6年生に「日々を大切にしてほしい」という想いを込めて、この本を選ぶことにしました。読み聞かせのための本を探す中、「えんとつ町のプペル」という本も読んでみました。漫才コンビ「キングコング」の西野亮廣さんが書かれた本で最近映画化もされましたので、気になり読んでみると、伏線がいくつか仕掛けられてあって読み応えのある内容でした。このように、白羽小の図書館等には昔から愛されている本から新しく人気のある本まで、バラエティ豊かな蔵書が揃っています。



【白羽小の図書館】

近年は活字離れが危惧されています。読書は心と想像力を育み、その時の時間だけでなく、その後の生き方をも豊かにしてくれるものだと思います。白羽小の子供たちにも、読書の楽しさを感じる子になってほしいと願っています。ちなみに、本校にある蔵書数は約8600冊、子供たちの白羽小図書館からの年間の貸し出し数は、一人平均で、昨年度15.6冊、今年度（2月現在）13.5冊です。今月15日～22日は読書週間として、親子読書ビンゴを計画しました。読書を通して親子で有意義な時間を共有できるよう御協力をお願いします。

※

感謝とまとめの3学期。朝の挨拶の際、「おはようございます。」の後に「いつもありがとうございます！」「お疲れさまです！」と付け加えてくれる子がいます。感謝の気持ちを態度で表そうとする浜の子の姿に心が温かくなります。（文責 校長）